ゆ　夢，それは先生になること

夢，それは学校の先生になることでした。いつのころからこんな夢を持ったのか分かりません。でも，昭和17年に入学し2年間を過ごした奈良市佐保国民学校の運動場で行われた教生先生の着任式で「先生になるのはいいけれど，こんなに大勢の人の前でお話するなんて恥ずかしいからやめておこうか」と考えたことを覚えていますから，当時すでにこの夢を持っていたことになります。

入学の前年まで，この学校に勤めていた父が担任していた高等科女子クラスの生徒がいましたから，こんなお姉ちゃんたちにちやほやされ「大きくなったら竹中先生みたいになるの？」と言われたりして，「そうか。先生になるのか」などと考えていたのかもしれません。

その父は著書「あしあと」に私のことを次のように述べています。「長男良行は昭和十一年二月二十六日、あの二・二六事件当日といういわくつきの誕生で、生まれた時からやや弱々しい子であった。幼時は父母とも若く健康で、物珍しさからよくあり勝ちな、思うまま、かゆい所に手の届く様な育て方をした様に思う。生長してからはきょうだいも多く、相変らずの生活の中で長男としての重荷もあり、少年時代から相当苦しみを味わったことと思うが、幼時はまず恵まれていたと言えるだろう。玩具なども十分に与えられのびのびと育っていた。しかし持って生まれた性格か、実におとなしいむしろ弱気な子で、手がかからず親は確かに楽であったが覇気がなく、その点では少々心配であった。また足弱でこれも一つの頭痛の種であった」

こんな心配をかけていた私に訪れた転換期が3年生になったときの父の転勤でした。新しい学校は，現在のＪＲや近鉄天理駅から8㎞の山の中にある22戸の村を校区とする丹波市第四国民学校藤井分教場でした。村の中央にあるこの学校は神社やお寺と同居し，神社や寺の境内を兼ねている運動場には鳥居や灯籠が立っていました。（この学校のことは「い：1年生は1人だけ」に書いています）

ここでは狭い運動場のかわりに学校を取り巻く山々が遊び場でした。儀式などの行事の度に行く本校までは4㎞ありました。最寄りのバス停・横川までも4㎞，しかし，回数が少なく坂道になると降りて歩き，あるいは押さなければならない木炭バスに乗ることはほとんどありませんでした。配給米の受け取りには町まで8㎞を近所で借りた大八車で出かけました。帰り道8㎞は登り坂ばかりで一生懸命に引っぱりました。こんな生活が私をすっかり健康にしてくれました。

周りは農家ばかり，ほかの仕事をしているのは，学校に勤務する父だけでした。そんな中で，大人になったら先生になるという目標が次第に明確になっていったように思います。

戦後，私たちは国中（くんなか）と呼ばれる平野部に下りました。しかし，違法なヤミ物資で生活することを選ばず餓死された裁判官のことが報道されたりする時代の生活は厳しいものでした。父が勤務する中学校には占領軍によって禁止された柔道の畳がありました。これを借りて来て敷いた倉庫の一室が私たち一家の住まいになりました。借りた石ころだらけの空き地が食糧を得る手だてになりました。父母と私，妹と2人の弟，6人は力を合わせて戦後の日々を生き延びるために一生懸命でした。乏しい配給米に父が日曜日返上で育

ててくれたサツマイモや野菜，父の勤務先のＮ校長先生が飼っておられた山羊の乳，田んぼでとったタニシなどが私たちの貴重な栄養源でした。こうした中で，父が大切にしていた音楽の書籍や同じく音楽教師であった伯父（終戦直前に逝去）から引き継いだ大量の楽譜を古書店に運びました。これはすぐに食糧に変わっていきました。「伯父の大切にしていたピアノやオルガン，電蓄などを寄贈しないでおけばもっとたくさんのお米になったのに」これは，物の価値に目覚めた私の不満でした。

昭和24年4月，5つの中学校が統合し，添上郡平和村外4か町村学校組合立都南中学校という長い長い名前の学校が開校し，私はこの学校の2年生になりました。3学年15クラスのこの学校には教室が5つしかなく，変則的な授業が行われていました。月曜日の午前は1年生，午後は2年生，火曜日の午前は3年生，午後が1年生というサイクルを繰り返すのです。5つの中学校が集まっただけ，校舎は未完成，荒れた校地の中で生徒の心も荒んでいました。卒業式のあとには傷ついた校舎が残っていました。そして，迎えた4月，私は3年生になりました。初代Ｔ校長は退職され，M教頭は小学校長に，父と同年代の先生の多くが転出・退職され，残った父には教頭という職が与えられました。入学式には，未着任であった校長の代理者としての父の式辞を聞きました。統合してまだ1年，旧知の先生の多くが学校を去られ，生徒数は750を越すという大規模中学校，宿直でもないのに帰宅しない日があり，帰宅すれば遅くまでローソク送電（超低圧の送電）で灯る薄暗い電球のもとで仕事をしていた父，どんなにか苦労が多かったことと思います。こんな生活の中でしたが，私の「先生

になりたい」という夢は一層強くなっていました。学校で一番小さかった私ですが，自分が学ぼうとする気持ちは人に負けない大きさがありました。

昭和26年3月，私はこの中学校を卒業しました。父の発案による新しい形の卒業式でした。卒業生は，学級での仕事のすべてを終え，下靴のまま式場に入ります。閉式とともにそのまま学校を出て，国道に並ぶ先生方や在校生に送られ帰宅の途につくのです。卒業式は無事に終わりました。

高校は学区制で郡山高校と決められていました。普通科だけでも10クラス，それぞれ50数名でした。私は1年5組，それは進学・就職の折衷コースでした。当時はとても進学なんていえる状況ではなかったのです。日本育英会から月額500円の奨学金を受け，学校の購買部で働くことで月額500円（パン１個が16円，1日の売り上げが20000円にもなるときのことです）の給与をもらい，育友会費等の免除を受けての進学でした。薄いブルーの表紙の教科書を持った進学コースの友人から「お前らの英語の教科書易してええのう」と赤と黄色に塗り分けられた派手な教科書を冷やかされ，その易しい英語さえしっかり頭に入れようとしなくなった私でした。そんな私を厳しくしかり，優しく励ましてくださったのは担任のＹ，Ｕ，Ｉの3人の先生でした。

2年生のとき，10月の人事異動で父は月ヶ瀬小学校長になりました。ここからの通学には往復6時間が必要でした。私は父の親友Ｓ先生のお宅に下宿させてもらい高校に通うことになりました。先生ご夫妻，1人っ子の「兄ちゃん」，祖父母に可愛がられての生活でした。

帰省の度の楽しみは，父の学校づくりを見に行くことでした。古い木造校舎の改築は望めないことのようでしたが，次のような夢を1つずつ実現していく父の顔は輝いていました。

1　薄暗い本館の採光設備を整え，宿直室を新設する。

2　放送設備を改善し，図書室兼映写室を新設する。

3　大きな用水槽を建設し，飲料水を確保する。

4　教具教材を充実し，教科学習のための教室を作る。

5　学校新聞を発行する。

学校新聞「かおり」は，Ｂ3判2つ折り4ページで父の特技である孔版技術を駆使したものでした。学校のニュースや児童の作品とともに，父の考えが掲載されていました。次ページの「人間雑感」もその1つで，父の教育に対する思いが盛り込まれているように思います。

1級だ2級だ仮免だ。先生の資格もいやにむつかしくなってきた。しかし教育者たる資格、ことに義務教育に於ては学歴より人である。人格である。子供を真に愛する。即ち全身全霊を打ち込んでより高い所に導く、この意気こそ教育者第一の資格ではなかろうか。

学歴なくとも知識は努力によって補える。認定講習をさぼり未だに上進できぬ者の負け惜しみと解されても致し方ないが、確かに現在の教育界は心の人、熱の人を要求していると思う。世事にも長けることはなるほど必要なことには違いなかろうが、世事にうとくとも、ただ黙々として理屈抜きに子供と学び遊び導く。これこそ真の教育者の姿ではなかろうか。

信念というものほど尊いものはない。信ずるところに向かって直進する姿ほど美しいものはない。但しその信念が誤りであったり、

方向が偏していたりしてはならない。真直でなければならない。あまりにも周囲を眺め、気にし、方角を誤ってはならない。

次に常に冷静でなければならない。興奮は興奮を呼び、本道を忘れて横道にそれるおそれがある。

次によく動かなければならぬ。骨惜しみしてはならない。困難なこと、人のいやがることに喜んでとび込んで行く勇気がなければならぬ。口で理屈を言い、手をポケットに入れ何事も傍観しているものは語るに足らぬ。常に冷静沈着であり、信ずるところに向かい骨惜しみせずに進んでいく。平凡であるが、私はこんな人間になりたいと思う。

……

こんな文に触発された私は，「大学に行ってもいいよ。できるだけのことはするから」との父の声に，勇んで奈良学芸大学を受験，就職コースからは珍しく中高教員養成課程理科に合格しました。それは，小さいころからの夢，教師になることを実現する第1歩でした。